



# ドメスティック・バイオレンスを根絶するために！！

## ママの話を聞いてあげて

手賀さんのうちでは、結婚した娘のアビ代さんが泣きながら相談しています。

アビ代「おかあさん、実は夫のヌマ男がすぐ暴力をふるうの。昨日も帰ってくるなり食事の用意ができていなかったといって30分も殴ったり蹴ったり。もうあざだらけ。私が謝ってもぜんぜん聞かないの。どうしたらいいかわからない。毎日怖くて怖くてしょうがないの。これってドメスティック・バイオレンスよ( 1)。別れたいけどどうすればいいかしら？」

母「何を言っているの！ 少しくらい殴られたからっておおげさな。家庭を守るためには女はがまんしなきゃいけないときもあるよ( 2)。だいたい経済力もないのにどうやって食べていくの？ 子どももいるんだし、かわいそうじゃないの( 3)。」

父「おまえも悪いんだろう( 4)。疲れて帰ってきて、食事が遅れたら誰だって怒るぞ。最近の若い女はわがままでいかん。」

アビ代「あたしだって仕事があるし、育児も家事も一生懸命やってるわ。でも、たまに遅れることだってあるわ。そう言ったら子どもの目の前でぼこぼこにするのよ。子どもは泣くし、もういや。( 5)」

まだまだ訴えは続きます。アビ代さんはがまんしなければならぬのでしょうか・・・

### パパ、どうしてママをぶつくの...

1 女性に対する暴力は、女性の人権を踏みにじり、男女共同参画社会の実現を阻害するものです。そもそも暴力は、その対象の性別や、加害者・被害者の間柄を問わず、決して許されるものではありません。夫や恋人などから暴力を受けている女性が多いうことや、社会の目に触れにくい実態を見れば、何らかの対策が必要です。そこで平成 13年 4月「配偶者からの暴力の防止および被害者の保護に関する法律（配偶者暴力防止法）」が成立したのです。この法律に基づいて各都道府県には配偶者暴力相談支援センターができ、市でも相談窓口を置いています。

### 妻を殴る夫はこんなに多い

平成 15年 4月の内閣府の「配偶者等からの暴力に関する調査」によれば、配偶者や恋人がいる(いた)人のうち、“身体に対する暴行”“恐怖を感じるような脅迫”“性的な行為の強要”などをこれまで一度でも受けたことのある人は、男性 9% 女性 19%で、女性の約 5人に 1人が経験しています。また女性の約 20人に 1人は配偶者等からの暴力によって命の危険を感じています。

### 誰にも言えない...

2 暴力を受けたときの相談先として「友人・知人」( 26%) 「家族や親戚」( 25%) がありますが、「どこにも誰にも相談しなかった」( 50%) 人が半数にのぼっています。その理由として「相談するほどのことではないと思ったから」( 58%) 「相談してもむだだと思ったから」( 52%) 「自分にも悪いところがあると思ったから」( 32%) 「恥ずかしくて誰にも言えなかったから」( 15%) などがあげられています。女性に対する暴力が表に出ない背景には、家庭内のことは家庭内で解決すべきだという社会の暗黙の風潮があるといえましょう。

### ママ、私を置いて行かないで

3 命の危険を感じるほどの暴力を受けた女性がなぜ家を出ないかという、特に子どもがいる場合は、ひとり親家庭への偏見や経済的な不安が考えられます。また上記調査で、誰にも相談せず「自分さえがまんすればこのままやっていけると思ったから」( 男性 9% 女性 17%) と答えた人も女性の 2割弱にのぼっています。

### ママは悪くないのに

4 DVで悩んでいる人が相談しても、このように「あなたが悪い」「殴られるにはそれだけの理由がある」と逆に責められることも多いのですが、たとえ理由があっても、暴力をふるっていいということにはなりません。自分の妻でも夫でも子どもでも、力で相手を支配することは許されないのです。

### パパ、ママをぶたないで！

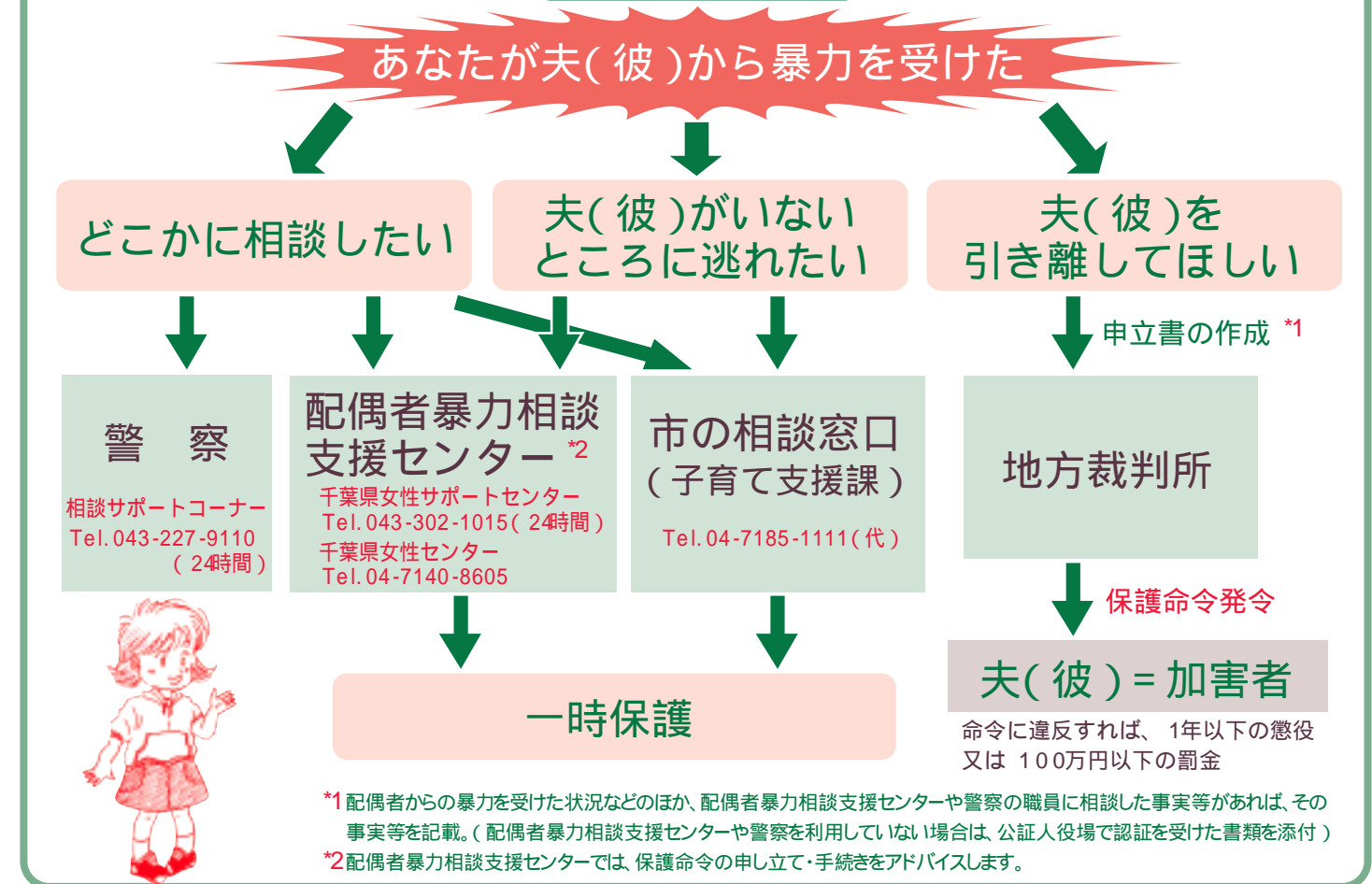
5 暴力行為を受けていた当時、子どもが「目撃していた」という人は 35%、さらに「何度も」暴力を受けていた人では、子どもが「目撃していた」という人は 6割近くになります。そのうち 19%は、子ども自身も暴力を受けていたと答えています。DVの中で育った子どもは、成人した後も被害者や加害者になる率が高いという調査結果もあり、日常的に暴力行為を目撃している子どもへの精神的な影響は深刻で、暴力の連鎖を断ち切るためにも、暴力行為から子どもを守る方策は急務です。

アビ代さんは、「配偶者暴力防止法」のことを聞いて、市の相談窓口に行ってみることにしました。



「ドメスティック・バイオレンス」はDVと省略されて使われます。直訳すると「家庭内の暴力」となりますが、日本では子どもからの親に対する暴力という意味で使われたことがあるので、内閣府では「夫・パートナーからの暴力」という言葉を使っています。DVには妻(恋人)からの暴力も含まれます。

## DV相談の流れ



## チェックしてみませんか？ あなたとあなたのパートナーとの関係

<p><b>身体的暴力</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>小突く・つかむ・殴る・蹴る・噛む・つねる</li> <li>腕をねじって、引きずりまわす</li> <li>物で殴る・投げつける</li> <li>髪を引っ張って、引きずりまわす</li> <li>立ち上がれなくなるまで、ひどい暴力を振るう</li> <li>刃物などの凶器を突きつける</li> <li>タバコの火を押しつける</li> <li>階段から突き落とす</li> <li>首を絞める</li> </ul>	<p><b>精神的暴力</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>何でも従えと言い、命令する</li> <li>発言権を与えない</li> <li>交友関係や電話の内容を細かく監視する</li> <li>実家や友人とつきあうのを制限する</li> <li>外出を禁止する</li> <li>何を言っても無視する</li> <li>罵詈雑言を浴びせる</li> <li>大声でどなる</li> <li>夜通し説教して眠らせない</li> <li>「誰のおかげで生活できるんだ」などと言う</li> <li>殴るふりをして、脅す</li> </ul>
<p><b>経済的暴力</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>生活費を渡さない</li> <li>外で働くことを妨害する</li> <li>洋服などを買わせない</li> <li>家庭の収入を何も教えない</li> <li>家計をきびしく管理する</li> </ul>	<p><b>性的暴力</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>見たくないのにポルノビデオやポルノ雑誌を見せる</li> <li>脅しや暴力によって性行為を強要する</li> <li>避妊に協力しない</li> <li>中絶を強要する</li> <li>不妊の原因を一方的に押し付ける</li> </ul>
<p><b>子どもをだ巻き</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>子どもの前で暴力を振るう</li> <li>子どもを危険な目に遭わせる</li> <li>子どもに会わせない</li> <li>自分の言いたいことを子どもに言わせる</li> <li>子どもに暴力を振るうと脅す</li> </ul>	



今回は、女性議員の草分けとして約40年間活躍され、この4月に引退された栗山栄子さんと、地域のコミュニティ作りの母体となる「まちづくり協議会」の会長として活躍されている近藤洋子さんの登場です。分野は違いますが、お二人とも意思決定の場に参画している素敵な先輩でした。

## 栗山栄子さん

(前千葉県議会議員)

最初は町会議員でしたが、立候補の動機は？そして仕事(政治家)のやりがいとは？

師範学校を出て、中学校で14年教師をしました。尊敬する大先輩に熱心に勧められて、いちばん大切な政治の世界にも女性が必要だと思って決断したんです。初めての女性議員で、副議長も経験したし、市長選挙では落選したこともあります。でも、議員の仕事は毎日生きている実感があるんですよ。政治って結局「人」ですからね。

## 仕事と家庭、特に印象深いことは？

私は忙しくて子どものお弁当は必ず作りました。でも教員のとき熱のある子どもを置いて修学旅行に行ったのはつらかったですね。自分の経験から産休や代替教員の制度を作ったんですよ。私はみなさんの支えがあって40年もやってこられたんでしょうね。それと健康と家族の協力ですね。

## 後輩、特に女性たちへのエールを

「狎れるな」。師範学校で受けた教養で、私のモットーです。女性も新聞の社説など読んで視野を広げてほしいですね。どんな些細なことでも全知全能をかけて精一杯ぶつかってほしい、そう願っています。



## 近藤洋子さん

(布佐南地区まちづくり協議会会長)

まちづくり協議会の会長になって何年？そしてこの仕事のやりがいとは？

5年目になります。就任して協議会の存在意義を高めるような行事に取り組みました。周りの理解と協力もあって、文化祭の門戸も広がり、子どもが楽しめる夏祭りになってきたのもうれしいですね。

## 仕事(キャリア時代も含めて)と家庭、特に印象深いことは？

娘が4歳のときに夫と死別して、母の手を借りて仕事を続けました。女性ばかりで子会社をつくったときは2年で黒字にしました。女性の力ってすごいんですよ。でも仕事ももちろんですが、家庭盤石が私の信条。娘とのコミュニケーションはテープレコーダーを使った“交換日記”。娘のいたわりに泣けたこともありましたね。

## 後輩、特に女性たちへのエールを

社会で生きていくためには、まず勇気が必要ですよ。そして言ったことには十分責任をとること。自分を輝かせようとしても失敗することはあります。でも、その苦しみを乗り越えることが大事だと思います。



## 講演会

## 「私のからだは、私のもの！」

(仮題)

## 案内板

日時：11月30日(日曜日)  
午後2時開会

場所：アビスタ ミニホール

講師：丸本百合子さん  
(産婦人科医師)

## 参加費無料

申込み・問合せ / 我孫子市男女共同参画担当 Tel.7185-1111(代)

“若い年齢層への性感染症の広がり” “性交渉の低年齢化”  
“性教育は、寝た子を起こす？” “更年期ってどんな症状？”

今「性・からだ」をめぐる情報があふれ、さまざまな論議があります。長年、産婦人科医療にたずさわって、「自分の性は自分の生き方」と、性における自立、権利回復のための講演、著作活動を行っている丸本百合子さんによる講演です。自分のからだ、パートナーとの関係、子どもの性などについて考えてみませんか。ぜひお出かけください。

## 編集後記

今回「かがやく」の特集は、DVという重いテーマです。「紛争解決手段に暴力を用いない」ということは、国と国との間にももちろんのこと、個人と個人の間にも当てはまる普遍的なことです。

DVは、これまで家庭のプライバシーに関することと軽視され、放置されてきました。配偶者暴力防止法の制定によって、社会的な問題とされ、被害者救済のための仕組みができました。

今まさにそのことで悩んでいる方には、救済制度を知っていただきたい、私たちとは関係ないからという方々にも目をそらさず考えてみていただきたい事柄です。(父 鈴木)

我孫子市は平成13年に男女共同参画都市宣言をし、平成14年は国と共催して記念事業「あびこ男女共同参画フェスタ2002」を開催しました。

今年11月14日には福井市で開催される「全国男女共同参画宣言都市サミット in ふくい」に福嶋市長がパネリストとして参加し、我孫子市の取り組みを全国に向け発表します。

市の取り組みが今後もさらに充実することを期待しています。

(編集長)

かがやくーあなたも、わたしもー Vol.5

発行：我孫子市

発行日：平成15年9月20日

編集：『かがやく』編集委員会 TEL.04-7185-1111

〒270-1192 我孫子市我孫子1858 我孫子市環境生活部 男女共同参画担当